

浄土

1988—9

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別投承認雑誌）第三二五号
昭和六十二年八月二十五日印刷 昭和六十二年九月一日発行
第五十四卷 九月号





九月の秀句

敬老の日の父母や事多し

佐藤 まさ子

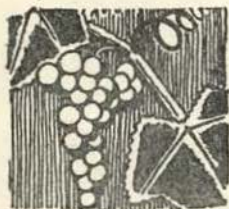
暮るゝまで山は晴れたり秋彼岸

石井 不息

三声ほどしてもう鳴かぬ虫もあり

星野 立子

九月号



かの仏の国土には、微風ふきて、
諸の宝行樹および宝羅網を動かし
て微妙の声を出だせり。

——『阿弥陀経』

目次

法話

秋の彼岸——日想観——……………真野孝信……(2)

＜連載＞

現代の生命問題を考える(上)……………藤木雅清……(8)

＝にこにこ法話⑤＝

いただきます……………長谷川岱潤……(23)

《特別寄稿》

須弥山の世界(一)……………後藤真康……(15)
——存続上人「世界大相図」を読む——

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <18>

海と山の狭間で……………木下隆一……(30)
——我が思い出に住む犬たち(4)——

◇◇長篇連載を終えて◇◇

合掌する善導像……………寺内大吉……(37)

表紙絵 小林治郎画

◇◇すいそう……「つくつく法師抄」◇◇

秋の彼岸——日想観——

真野孝信

(八幡市正法寺住職)

九月に入ると、残暑未だ去りやらぬ中にも、蟬のなき声も弱まり、夕暮れになると、赤蜻蛉の目にとまる数も増えて、朝夕は凌ぎよく新涼を覚える。氣候の不順をかちながら、四季の移りを身に感じさせてくれる大自然、その中につつまれて生かされる私達の幸せを、つくづく懐う季節である。

九月、陰曆にいう長月である。長月とは、夜長月の意であろうが、古典に「秋ふかみ恋する人のあかしかね、夜をなか月といふにや

あらむ」(拾遺和歌集)を思いつつ、更には色取月(いろどる月)ともいわれ、彩色、着色、色の配合を意味するなど、その他陰曆の呼称には深い味を覚える。

然し、九月は台風シーズンである。招かぬ客の襲来が気になる。二度三度と大小の被害に苦汁を嘗めた私には、気がかりな季節でもある。台風の進路予報で「室戸」の声を聴くと、どう仕様もない天災とはいえ、万一の被害にもその軽少を念じつつ諸般の手当に寺族

動員の毎歳である。室戸岬に上陸する台風の進路は、当地直撃の公算が大きいからである。

仏教徒とりわけ浄土教徒にとっては、何といても秋の彼岸である。中日である「秋分の日」は、祖先をうやまい、なくなった人をしたのぶ日と表現し、「春分の日」を希望の日とし、「秋分の日」を追憶の日として、国民の祝祭日となっていることも、自然と風土に根ざす宗教的な信仰と民族性を物語るもので、その奥床しさが、わが国の特色でもあるうか。

彼岸は此岸の対語で、古代印度の文語（梵語）パーラミター即ち波羅蜜多に淵源し、それは「度」と訳され、わたること、彼岸は到彼岸（彼岸に到る）、あるいは入彼岸（彼岸に入る）と承知すれば、仏道修行の上にも信仰生活の道標となる。

此彼の二岸について、彼岸は悟りの世界（悟境）、此岸は迷いの世界（迷界）とし、その

中間の隔てを煩惱の河川に喩えることから、本来の意義は場所をいうのではなく、その境地即ち置かれている立場の、人の状態である。世に「足を洗って、岸に上れ」と、目覚めを促す言葉も、煩惱に惑溺する者への警語である。

此岸は、穢土といわれ私達の今生きる現実の境域、再度なき人生を生きる人間界の実態で、現に今も砲弾の飛び交う世界、さらに核兵器の廃絶は全人類の悲願でありながら、戦争の抑止力であるにせよその備蓄と研究、飢餓と傷病に苦悩する難民問題、いや、科学の発達と物質文化の豊かさをもって、経済大国を自負するわが国内にあっても、刑事民事の案件は枚挙に暇なく、身近かに発る人倫情誼の問題等々、人の由って為せる罪惡の数々をはじめ、人為の限りを尽しても避けることの出来ない老病死の苦患の中に毎日を過してい

る。仏教では、このような世界のことを娑婆即ち忍土にんどといって、耐えることなくしては一日として生きることの不可能な世界と説き、この苦患、不安、悲哀の全ては、人間の心身をなやませみだす煩惱に起因するものとして、濁悪じよくあくの世を如何に生き遂げるかを課題とし、人生の寄るべとして、真理を説いて転迷開悟（迷いを捨ててさとりを開くこと）を促し、あるいは信受奉行（教えを信じて、その通りに生きること）を勧め、あるいは譬喩（たとえ）、因縁（ゆかり）を、多彩多様に展開して、全人に及ぼし、無常一期いちごの人生を有意に全うさせようとする。

彼岸は浄土であり、安養の世界である。まさに一切の苦穢（くるしみとけがれ）を超脱した浄楽（清浄快樂）の理想境である。それは、世自在王仏御在世の昔、国王あり、仏の説法を聴聞して発心し、国を棄て王位すを捐て（す

て去る）、出家して比丘となり、発願して法蔵菩薩と号し、衆生（一切の世人）救済のために超世四十八の誓願を立て、この願の悉くを満足して等正覺（法の一切を身につけた円満無欠の覚位）を成じ、その報果として衆生救済の仏国土を莊嚴し、阿弥陀仏となり、今も現にその国に在まゐりて説法し、「南無阿弥陀仏」と仏名を称えて往生を欲もめる念仏者を導き給う仏国であり、無為涅槃界と云われる生滅變化のない永遠に真実の無量寿国である。この世界は、恒存的な実体の実存を追求すべき世界ではなく、哲学的な觀念上の世界でもない。どこまでも純宗教的に客観してその实在性を認める世界であるから、その方所を「これより西方十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽と曰う。その土に仏まします。阿弥陀と号したてまつる。今現にましまして説法したまう」（仏説阿弥陀經）と、浄土の所在とその

方向、名義と主仏が説かれてある指方立相の浄土である。

指方立相の浄土とは、指方は方向を指定して西方とし、立相は浄土の莊嚴（おごそかなととのい）を中心とした様相を建立し、阿弥陀仏の相好（すがた）を説いて、迷いやすい私達衆生の心境を安定させ、確信をもたせるための阿弥陀仏の慈悲心によるものである。浄土の教えは、一切衆生、殊に凡夫（煩惱を捨てきれぬ人）の救済を本意とされ、本来、阿弥陀仏の自証（自身の内に得たさとり）に内在する無相無方の浄土（清浄にして穢れなき境域）に、凡夫を開導せんがために「但し是れ暫く機（人のうつわ）に随う」として設けられた善巧方便である。善巧方便とは、菩薩が衆生を済度するに当って、機宜（相手の人がら）に応じて自由自在に施設（設備をととのえること）の上で教化する知用（知恵のはたらき）をいうので、浄

土宗の高祖唐の善導大師は「末代濁惡の凡夫、相を立てて心を住するすら尚ほ得ること能わじ、何かに況んや相を離れて事を求めば、術通（専門的な技術を身につけること）なき人の空に居して舍を立てん（空中に家屋を建立する）がごとし」（觀經疏定善義）と。さらに元祖大師法然上人は「十方に浄土おおけれど、西方を願うは十惡五逆（身口意の三業より生ずる十種の罪惡と五種の逆罪）の衆生の生るる故なり」と弥陀釈迦二尊の大慈悲と祖師の憐愍に導かれて濁世の苦境を生きる信仰の日暮しに、力強い友連れの旅を想う。

先年、笑福亭松鶴さんが亡くなった折に、仁鶴さんが師匠を語られた中に、「煩惱を振り分け吾も西の旅」の遺詠を発表されるテレビの前で、「すばらしい！」と思わず声を出して感歎させていただいた。それは前代松鶴さんの「煩惱を振分けにして西の旅」に続か

れる西往の旅、西方浄土に大往生を遂げられた法悦の終焉として、正に私達の先達に対して敬意を表せずにはおれなかったことを想起する。

私は昨年の秋、三宅春光師の特招をいただいて、天草の南端牛深市久玉の無量寺に、約三十年振りの法縁を結ばせていただいた。熊本空港に差し廻された御厚意の車で、天草五橋を渡る観光の三時間余の道程は、開発途上の近代化の中にも、わが国水産の宝庫、海食地形の見えかくれする車窓の景観はすばらしい、滞在中に、予而^{かた}よりの念願であった日想観を修すことが出来て御住職の御配慮に心から感謝している。

日想観は釈尊が現世の苦境を脱して憂惱^{（憂いや悩み）}なき世界への往生の教示を請願した韋提希夫人^{（王舎城主ビンバシヤラ王の妃に）}して苦坑の中に安樂を得た）に対して説かれた修

行法である十六観法の第一で、太陽が真東より出て真西に没する時節が最も適しているのである。

「如来いま韋提希及び未来世の一切衆生をして、西方極樂世界を観ずることを教えん、仏力を以ての故に、当に彼の清浄国土を観ること、明鏡を執て自らの面像を見るが如くなるべし云々」と前説して、「汝及び衆生、應に心を専らにして念を一処に繫けて西方を想うべし。云何想を作す。凡そ想を作すとは一切の衆生、生盲に非ざるよりは、目有るの徒、皆日の没するを見よ。まさに想念を起して、正坐して西に向い諦かに日を観ずべし。心を堅住にし想を専らにして移さざらしめ、日の没せんと欲して、状態鼓の如くなるを見よ。既に日を見己りなば、目を閉じ目を開かんに、皆明了ならしめよ。是を日想となし、名づけて初観と曰う」（観無量寿經）

私は經説をそのまま和語をもつてし、「一切衆生」のお呼びかけこそ、當に私への如来直授のみ教と頂き、修法の現場に案内された。

善導大師はその著觀經四帖疏に、想觀の法を詳述して、乱想（想念の定まらぬ）行者の邪觀（まちがった想觀）を戒めておられ、凡僧にはそれを読解し得たとしても、正觀を得ることは不可能で、況して、その実能を筆舌に託すことは敍されないが、四帖疏を学んだ学生頃、淀川堤に坐して西山に入る夕陽を殊勝に拝んだ時や、派兵の寸時に、マニラ灣の埠頭に佇んで觀た夕やけ空の入陽の感激とは違つて、齡七旬に及ばんとして、漸く西方の淨刹を思慕する念の真劍な高まりが、日想觀の念願となった。今はその想い出の一駒を記して、秋の彼岸に寄せる結びとする。

海ぞいの適所に待期すること暫時、愈々陽は、大空に赤い鼓を懸けたようなすがたで、

茜色に染まった夕空を下降し始めた。身を正して静かに合掌念仏し、念を西方の一処に止め、淨土の方処を確認するも、流れるような浮雲の去来は陽を遮り、吾が煩惱の業障を論す。雲間に出てた陽の光は、海面に一路の筋となつて東岸に居す吾を直射し、如来の慈光に浴す吾を覚える。逆光に黒影となつた漁船が、動力の音と共に光路を横切つて島かげに去る。人の世に生れて、その一期を明し暮す営為の衆生、その人もどの人も、みなそれぞれの今日を生かされて活きる恩沢の貴い姿である。

夕汐の海面に、細い横縞模様の带状に輝やく金波の陽射しは、手繰られるように次第に遠退き、その後を追うように身を引かれる想いの私を遣して、赤い太陽は東支那海の水平線の彼方に没し、薄墨のような夜の帳が、日没の余光を愛でるように静かに降りた。

△連

載▽

現代の生命問題を考える(上)



藤^{ふじ}木^き雅^が清^{せい}

(D・E・S
臨死問題研究会座長)

はじめに

これから述べようとする「生命問題」とは

何か。

それは科学技術、なかんづく医療技術がもたらした緒問題で、新たに人類が選択をせまられているものである。たとえば、生殖を人

工的にしてよいか、墮胎は親や医療者の権利か、男女産み分けは正当な医療行為か、出産前に障害があることがわかったら墮胎してもよいか、痴呆性老人、寝たきり老人、ひとり暮らしの老人は誰が扶養するのか、ターミナル・ケア（末期医療）はいかにあるべきか、さまざまな管につながれ機械に囲まれ家族から隔離されてまで延命すべきなのか、安楽死や尊厳死は認められるのか、臓器移植は是か非か、脳死は人の死か、等々であり、これらは奇しくも釈尊が説かれた四苦（生老病死）にことごとく関わる問題である。奇しくもというべきではなく、当然のことながらというべきである。

一、倫理で解決するか

わが国では、これらの問題を総じて「生命

倫理」という新しい枠組み（学問分野）で語られているが、そもそも「生命倫理」とは、R・V・ポッターの提唱したバイオエシックスの訳語で、「人間が生存をまっとうするためには、自然の摂理をどこまで侵していいのかを考えよう」という立場からスタートしており、本来の理念からすると、公害などの環境汚染問題から自然林伐採などの環境破壊問題をも含むものである。しかし、言葉がひとり歩きしたごとく、わが国で語られる場合、「人間の生命」の「医療技術」に關した「倫理的」な問題、つまり医の倫理に限定して語られる場合が多いように思われる。縮み志向の日本人らしく、局所的な側面のみで論じられている。

さらに、「倫理」という語も問題をむつつかしくしている。「倫理」の語が、問題を考えるうえで混乱を来している理由はつぎのとおり

りである。

この語がマスコミに頻繁に登場したのは、筆者の記憶では、ロッキード事件の議論のなかで「政治倫理」という言葉が使われたしてからで、近年では「教育倫理」「経済倫理」「医療倫理」などと幅広い分野に使われるようになってきている。これらの場合、従来の「道徳」という語の代わりに使われており、「正しくはどうあるべきか」という意味である。しかし、戦後のわが国の宗教否定とも思える風潮のなかで、道徳といっても、倫理といっても、その根拠はどこに置いているのであろうか。あえて宗教否定という極端ないい方をしたが、その理由をいささか敷衍してきたい。

たしかに戦後のわが国は、宗教を否定してはいない。しかし、個別的な教団の教義や活動を強制してはならぬという法律を、じっさ

いには行政や教育の場では拡大解釈し、「目に見えないものに対する尊敬の念」とか「人間の本源に対する自覚」といった普遍的宗教をも不可触なものとしているのが実情といえる。それでは宗教を不可触なものとして退けた場合、いったい何を抛り所とするのだろうか。現代のわが国を一瞥するに、それは法律のみに拠っており、その結果、法律に違反さえしなければ何をしてもいいという風潮を蔓延させている。「こころの時代」といわれて久しいが、それは、このような精神的抛り所のないギスギスした世の中の反映であるといえよう。

とすると、「こころの時代」を取り戻すためには、根本原因である宗教を見直すことであるはずなのだが、人びとはそこには目が向かず、小手先の操作でこの病いを治癒しようとしている。「倫理」の氾濫も、この根本原

因を糊塗するもののひとつにすぎない。

このような理由で、「倫理」という語を使うと問題がいつそう曖昧になり混乱を来すということを経験検討の前提として指摘したのである。

一、バイオエシックスとは何か

それでは、訳語としての「生命倫理」ではなく、原義のバイオエシックスについて考察していきたい。

二〇世紀に入って産業面では近代化、思想面では実存主義という潮流があった。工業、建築などの近代化は、科学技術のそれまでにない急速な進歩と相俟って目覚ましい成果を遂げた。また、人間中心の実存主義は、人間を相互に交換可能な要素によって成立しているとする構造主義に取って代われ、宗教や

歴史を軽んずる傾向が強くなっていった。

いっぽう、一九六〇年代ごろから、これとは別の流れが並行して生じてきた。

この新しい流れのあるものは人種差別に反対する動きであり、ウーマン・リブ運動であり、公害反対、核廃絶の運動であり、医療見直しの動きであった。これらの運動は、当初は個々のものであり、それぞれの分野の人びとが個別に問題意識を持っていたにすぎなかったが、ベトナム戦争終結以後、その反省から、次第に大きな視野からの統合的枠組みで考えられるようになっていった。これらの新潮流は、いずれも無機質な近代化主義や人間性疎外の構造主義の行き詰まりから生じたものであり、文字通りポスト・モダニズム（脱近代化主義）、ポスト構造主義と呼ばれている。わが国では、建築やファッションの分野でよく使われているが、ようするに、学間に

しろ、経済にしろ、社会一般がますます細分化し矛盾が表面化するなかで、新しい価値観を大きな視野から模索しようとする動きである。上述したバイオエシックスも、この一端に位置する。

このような経緯を踏まえてバイオエシックスを考えると、たんに「(人間の)生命倫理」という視点からのみで、しかも倫理の拠り所となるものも明確にせずに答えを見出そうとしているのがわが国の現状である。

三、なぜ生命問題なのか

筆者は「D・E・S—臨死問題研究会」を主宰している。この会は若手浄土宗僧侶一三名によって構成し、広く現代における「死」の周辺の問題をテーマとしており、医療従事者らと交流を図りつつ勉強会を重ねているも

のである。いささか手前ミソではあるが、以下、会発足のキッカケとなったいくつかの点を述べることにする。

まず、はじめに、冒頭で羅列したようないわゆる「生命問題」が現に世に問われているのに、宗教界、とりわけ既成仏教教団からの見解が示されていないことに疑問を抱いた。「人間のもっとも厳粛な死の儀式を司っているわれわれ僧侶が、かかる諸問題に無関心でよいのか」と。そして、「なぜわれわれ僧侶は死後儀礼に終始していて、現に死に臨んで不安に苛まれている人がいるのに、そのような末期医療の場で無力なのか」と。

上述したように、人類はいままさに、科学技術がもたらした新たな問題につきつけられているのである。これらのテーマに答えられるかどうかは、宗教自身が価値観の多様化する現代に通用するかどうか問われていると

もいえよう。さらには、儀式の在り方、平生の教化の在り方、檀信徒との関わり方、等々の根本的な見直しを迫られているとも受け止められよう。

四、「生」を見なおすために

それからもうひとつ、なぜ「死」をテーマとするのか。それは混沌のなかで見失われている「生」を見なおすためである。

なぜ「生」が見失われているか。混沌というのは、価値観の多様化するなかで、人びとは身の回りの環境にふりまわされて人間の本質を忘れていくからである。

人びとが忘れていく人間の本质とは何か、それは「いずれ死すべき存在である」ということである。だから、われわれは「死」をテーマにする。こういうと、「そんなことは当

たり前だ。先刻承知だ」という人が少なくない。しかし、そういう人に限って「でも、いまの自分じゃない」と思っているのだ。そして、相も変わらず混沌の生活をつづけていることが多い。だから、あらためて「死」へ目をやり、「いずれ死すべき存在としてどう生きるか」を考え直すことがどうしても必要なのである。デス・エデュケーション(死の教育、あるいは死の準備教育ともいわれる)の意味は、まさにここにある。

現代の混沌について、たとえば教育問題、障害者問題、老人問題から、公害、核の問題、ひいては、財テクや土地高騰の問題に至るまで、根はひとつであると思う。それは、すべて抛り所のない生活に明け暮れているためであるといえよう。

(以下次号)

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の實踐をしてみいました。現在、『浄土』誌は五十四巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してみたい、担当のもの、一層の精進をお誓いいたすところです。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わたく、ここに心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

特別寄稿

須弥山の世界（一）

— 存統上人「世界大相図」を読む —

後藤真康

（東京・江東区円通寺住職、農博）

まえがき

先に本誌八年号で存統上人作「世界大相図三幅対」について紹介させていただいた。今回は引続きこの大相図をもう少し詳しく読み、眺めながら、須弥山の世界を紹介させていただきたい。須弥山世界観は小乗仏教の教えであり、今日の科学からみれば取るに足らないものであるかも知れない。しかし、それは観無量寿経等の大乘經典にも取り入れられ、数千年にわたってアジア民族に信仰されてきた。また芸術文化の土台ともなり、日常用語にも入り込んでいる。そこでこれをいま改めてふりかえって見ることも決して無駄ではな

ばこの世界は須弥山という巨大な山を中心としているので、普通「須弥山世界」と呼んでいる。

須弥山世界については、俱舍論のほか長阿含經じやうあくしやうや立世阿毘曇論りつせあひどんろん等にもその形や大きさが書いてある。つまり、須弥山世界とは古代インド哲学が生み出し、仏教に取り入れられた世界観である。諸經に説くところは若干異同があるが、存統上人はこれらの經典を取捨選択してわかりやすい図に書き表したのである。

存統上人以前にも須弥山図はあった。望月仏教大辞典の付図には、チベット、ビルマ、中国でつくられた須弥山図を載せており、「アジアのコスモスとマンダラ」(杉浦康平、岩田慶治)にも存統上人や円通上人の須弥山図のほかタイ、チベットの須弥山図が載っている。しかしこれらと存統上人の世界大相図(以下、「大相図」という)とは大分違うところがある。他の須弥山図の多くは密教のマンダラのように仏像を描いたりしてかなり象徴化されているのに対し、大相図には仏像がない。飛天や蓮華といった通常の仏画にある装飾すら全くみられず、写実的な絵と漢文だけで構成され、一見、学術解説書といった印象を受ける。この点は円通上人の「須弥山儀銘」も同様であるが両者の印象はかなり異なる。すなわち、仏典に書かれた寸法どおりに縮尺すると須弥山世界は円通上人の須弥山儀図のように平たい円盤状となり、須弥山はチップケな印象を与える。大相図では相対的な大きさをあえて無視して須弥山を中央に大きく立体的に描き、縦長の構図とした。こうすることにより須弥山の姿は堂々とした印象を与え、仏のお姿にふさわしくなった。これは大相図

の特に優れた点の一つである。なお、大相図の原図は一色刷であるが「アジアのコスモスとマンダラ」にはこの図に着色したものが掲載されている。これは龍谷大学図書館蔵のもので、妙高山の南面は青、西面は赤、七金山は鉄色という風に仏典の記載とは異なるが、大変奇麗に色が塗られている。

ではしばらくこの図と説明文を詳しく見てみよう。大相図では縮尺率を無視した代わりに須弥山や諸山、諸海の面積や長さを図中に詳しく記載しこんいる。たとえば、『妙高山』の高さは八万由旬で、『金輪』の径は十二億三千四百五十由旬である。「由旬」は古代インドの距離の単位であるが、その長さは時代により差があるといわれる。また、三千が千の三乗だったりすることもあるから、あえて換算しない方がよさそうである、諸山の高さ等には一定の法則性があるが、あまり複雑なので紹介を省略することとしたい。とにかく、途方もなく巨大なものが整然と配列されていると思えばよいであろう。

妙高山、帝釈天、四天王

大相図では中央部約三分の一をとって須弥山世界を大きく描いている。四角の台地の上に立つ頭でっかちの山が須弥山である。『須弥山』は梵語スメル(蘇迷盧)の音訳で、その意味は「妙に高い」であるから「妙高山」ともいう。長野県の妙高山はこれにちなんで名付けられた。大相図では中央に聳える山を『妙高山』と記載して須弥山世界全体と区別している。その説明によれば、妙高山は腰が細い長方形で側面の四面は宝玉でできている。

すなわち、北は金、東は銀、南は瑠璃、西は『頗胝迦』（スハーチカ、玻璃）であり、その色が空に照り輝いている。人間世界の閻浮提は南面にあるから人間界の空は瑠璃色に輝くのである。

妙高山の頂上は周囲を山で囲まれた大きなベランダ状になっている。ここは『忉利天』と呼ばれ、中央は奇麗な庭園で『円生樹』や『善法堂』がある。まん中の『喜見城』には『帝釈天』が住んでいる。帝釈天はインド神話のインドラ神が仏教に取り入れられ、仏法の守護神となったものである。神話文学のリグ・ヴェーダによれば、インドラ神はギリシヤ神話のヘラクレスにも似た強力勇猛でかつ人間性の豊かな神で、最も人気があったらしい。だからこそ仏教に取り入れられ、地上世界の最高所に住する守護神とされたのである。阿弥陀經の冒頭に「及び釈提桓因等の無量の諸天、大衆と俱なりき」とあるが、この「釈提桓因」も帝釈天のことである。現在では柴又の帝釈様が、車寅次郎、人呼んでフーテンの寅さんの故郷として有名になってしまった。

帝釈天の四方に各々八つ合わせて三十二の天があり、帝釈天を加えて『三十三天』ともいう。忉利天とは梵語で「三十三の天人の住みか」という言葉を音訳したもので、忉利天と三十三天は元々同じ意味である。なお、中国の仏教では「天」という字で場所である天界を現す場合と、そこに住む天人（神）を現わす場合とがある。大相図でも両者が混合して使われている。

三十三天の四角の峰には『金剛手』が住んで諸天を守護している。金剛手とは「金剛杵」

を手にする者という意味で、修羅の一種である。金剛杵はインドラ神の武器であり、密教の仏具である独鈷^{とくこ}や三鈷^{さんこ}はこれに基づいている。

妙高山の中腹は『四天王』の住所の『四王天』である。四天王とは『東方持国天^{じこくてん}、南方增長天^{ぞうぢょうてん}、西方広目天^{くわうくわくもく}、北方多聞天^{たもんてん}』であり、各王にそれぞれの国を領し仏法を守護している。お寺の本堂の四方にこの四天王のお札やお像が飾られていることがあるのはこのためである。日本書紀によれば聖徳太子は四天王を護国の神として信仰し、大阪の四天王寺を創建されたといわれる。「頼光や義経の四天王」などと強い家来を四人数えあげるのも仏法の四天王にあやかっただのである。北方多聞天の別名が「毘沙門天^{びしゃもんてん}」である。平安時代に東北の蝦夷の統治に大功のあった奥州鎮守將軍の坂上田村麻呂は、北方鎮護の神である毘沙門天を厚く祭ったという。毘沙門天が日本で特に有名なのはこのせいかも知れない。

なお、この図には書かれていないが、長阿含經によると須弥山は七重の宝牆、七重の欄楯、七重の羅網、七重の行樹で莊嚴され無數の鳥が鳴いているという。阿弥陀經に説く極樂の莊嚴と同じである。古代インド人の理想の一つなのであろう。

妙高山のふもととは上から『第一層級四王住』から『第四堅手天』にいたる四層をなし、その最上層が長くのびて四天王の住所となっているのである。妙高山の回りは七層ずつの山脈と内海で交互に取り囲まれている。この山脈を『七金山^{こんせん}』といい、それぞれ四辺形で各辺に高峰がある。高峰の数は第一層の二つから第七層の百二十八まで段々増えて行く。妙高山麓の下三層と七金山は四天王の領地で、天人竜鬼等の『八部所』(八部衆)が住んで

いる。七金山はそれぞれ名前がついている。例えば、最外層の山は『尼民達羅山』である。尼民達羅とは魚の名前で、そのくちばしがとがっていて山の形に似ているのだと書いてある。その内側は『象鼻山』で象の鼻に似ており、次ぎは『馬耳山』で馬の耳に似ている、といった具合である。星座の命名のようで面白い。これらの山の名前は諸経により差があるが、存統上人は解りやすい意識名を採用している。一方、内海の方は単に内側から第一く第七内海と呼んでいる。内海は極楽の蓮池と同様に『八功德水』で満たされている。「八功德」とは「甘、冷、軟、輕、清淨、不臭、飲むとき喉を損ぜず、飲みおわって腸を傷付けない」の八つの長所をいう。

四大洲、閻浮提（胆部州）、閻浮樹

尼民達羅山の外側の海は第八海で塩水である。一番大きく、妙高山の四方に各一つあるのが『四大海』という。各海に『大洲』（大陸）がある。『東勝身洲、南閻浮提、西牛貨洲、北俱盧洲』である。閻浮提は「胆部州」ともいい、これがわれわれ人間の住んでいる世界である。四洲にはそれぞれ二つずつの中洲と五百の小洲（島）が付属している。閻浮提のわきには「猫牛州と勝猫牛州」が書かれている。この名の由来はよくわからない。閻浮提以外の州や島にも住民がいる。小洲の住人は体が小さく小人のようだという。ちなみに西遊記の孫悟空は東勝身洲傲来国花果山に生まれたことになっている。

大相図の四大洲の形をよくみると、東は半円、南は三角、西は円、北は四角に書かれて

いる。これも經典に基づいたもので、この四つの形で四大洲を象徴した仏画もある。この四つの基本形はのちに地（四角）、水（円）、火（三角）、風（半円）の四元素の象徴とされ、空の象徴の擬宝珠と共に五輪塔を形成している。閻浮提が三角なのはインド亜大陸の形の基づいており、火とは関係ない。四大洲の住人の顔は各洲の形に似ているといわれるので、閻浮提を人の顔に似た卵形や舌形にした図もある。

閻浮提については存統上人は別に『閻浮提図付日宮図』を書き、詳しく説明している。その原典は主に立世阿毘曇論である。その一部を紹介する。『閻浮提』は逆三角形をしており、その上端に巨大な『閻浮樹』が生えている。閻浮提の名はこの樹からきている。

「閻浮」は梵語のジャムブを音訳したものである。閻浮樹の下は雨期も湿らず、夏は涼しく冬は暖かい。甘くて大きな果実となり、大殿のような鳥や大象のような猿がいてこの果実を食べるという。二層の林と二層の池が半月形にこの樹をとりまいている。大相図には説明がないが、大智度論によると閻浮樹の間に河が流れており、そこに産する砂金を「閻浮檀金」というのだそうである。その下（南）に七層の森林と七つの河があり、さらにその下に『烏禪那伽海』と『烏禪伽羅山』があつて、これが人間世界の北極につながっている。以上が大相図に書かれている閻浮樹の説明である。なお、俱舍論等によると無熱惱池のそばに巨大な樹があり、これが閻浮樹ともとれるのでそのように書いた図もある。しかし存統上人はこの説を取らず、立世阿毘曇論は従つて遥か北方、七層の森林のかたに閻浮樹の位置をさだめている。

に　こ　に　こ　法　話

〔5〕

い　た　だ　き　ま　す

今日はお母さんが、夕方から部内のお寺さんの奥さんの御法事でおでかけです。

「あなた、夕飯の支度ほんとにしないでいいんですか」

「ああ、たまには俺の腕前をミーちゃんに見せとかないとな」

「でも、かえって失望されたら」

「母さんは僕の腕を信用してないな」

「ええ」

「もう、早く行きなさい」

「それじゃお願いします。行って参ります」
不安げな顔をしながらも、とっても嬉しそうに、お母さんは出かけて行きました。

お父さんは作務衣の袖を肘まで捲り上げ、早速台所に行き、冷蔵庫を覗き込みました。

「さあ、何にするかな、玉ねぎと人参、にん

はせがわ
長谷川 岱一潤

(東京・品川区戒法寺住職)



にく、お、豚肉のぶつ切りがあるじゃないか、よし今日は、カレーだ」

お父さんは独りごとを言いながら、台所の引き出しを探しますがカレーのルーがありません。いろいろな戸棚を開けて探しているところに、ミーちゃんが学校から帰ってきてました。

「ただいま、あれお父さん台所なんかで何してんの」

「ああ、お帰り、今晚お母さんお出かけなんだ。それでお父さんが夕食を作ろうと思うんだけど、カレーのルーがないんだよ、ミーちゃん知らないか」

「へえー、お父さんが夕食作るの、すごいねえ。カレーのルーならあるとすればその引き出しだよ。あれ、無いや、お父さん、私買ってきてあげるよ。ほかに足らないものなあと」

「そうだなあ、じゃがいもと、あとサラダを作るからレタスとトマトも買ってきてくれなにか、このサイフで足りるかな」

「充分よ、じゃ行ってきます」

ミーちゃんの何とも自身に満ちた態度に、お父さんはびくりしていました。もうお母さんのかわりが充分勤まりそうです。ミーちゃんに作ってもらった方がよかったなあ、と内心思いましたが、もうお父さんが作るって言うってしまった以上頑張るしかありません。「よし、これは一つうまいの作るぞ、今のうちに玉ねぎと豚肉をいためておくか」

お父さんは、はりきって玉ねぎとにんじくの皮を剥き、みじん切っていたため始めました。

「ち、そうそうしょうがも入れたほうが良かったかな」

お父さんはもう夢中です。

「ただいま。お父さんもなかなかやるじゃない」

ミーちゃんは帰ってくると、お父さんの横に立って、いため方を見ながら言いました。

「なかなか手つきいいだろ。お父さんだって、独身時代はカレーはよく作ったものなんだ。

ミーちゃんも手伝ってくれるかい」

「ああいいよ。じゃがいもの皮むこうか」

「だいじょうぶか、手まで切るなよ」

「お父さんより慣れてるって、まかせなさい」

「お父さん、それにしてもんにく多すぎない、すごい臭いよ」

「これが美味しい秘訣なんだよ」

「ずいぶん長い間いためるのね、次人参切るわね」

「おお、気が利くな」

「ミーちゃんはお料理好きかい」

「作るのには余り好きじゃないけど、食べるの

は大好きよ」

「はは、そりゃそうだな」

「あのね、お母さんもそうなんだって。だから休みの日ぐらい、少しは手伝ってあげようと思ってるんだ。一人で好きじゃないことやるのって辛いもんね」

「へえー、ミーちゃんって偉いね」

「でもそれで包丁の使い方なんか覚えられたんだよ。クラスの子の中には、包丁持ったこともないって子いっぱいいるんだから」

「ふーん、そうなんだ」

「うちの親ってさ、私たちにああしろこうしろって言わないかわりにさ、自分たちのことばかり言うじゃない、あれってずるいんだよね。命令されるとき、やるもんかって思うんだろうけど、うちみたいに自分たちはこういう気持なんだなんて言われると、つい可哀想でやってあげちゃうもん。何か変なんだ」

「いや、ミーちゃんが優しいんだよ、お父さんはしあわせですよ。ほら、その肉に下味をつけて、小麦粉をまぶしてバターで焼き目がつくまでいためるんだ、ミーちゃんやってみるかい」

「やるやる、へえ、こうやって作るんだ」

「肉ができたらじゃがいもと人参も軽くいためてと、後はさっきの玉ねぎの鍋にみんな入れて、ワインをふって、お水を入れて、しばらく煮こんでと」

「お父さんのって、本格的だね」

「みなおしたかい」

「うん、びっくりしちやった」

「今のうちにお父さんは本堂でお勤めして、雨戸締めてくるから、ミーちゃんも自分の事していいよ」

「じゃ、宿題やっちゃお」

しばらくして、お父さんはサラダも作り、

カレールーも入れ、すっかり出来上がってから、ミーちゃんを呼びました。

「ミーちゃん、そっちのテーブルかたずけて頂戴」

「もう出来たの、すごいサラダも出来てる」

「さあ美味しいかな」

お父さんとミーちゃんは、手を合わせ、

「いただきます」と言って食べ始めました。

「美味しい、カレーはお父さんのほうが美味しいね」

「こら、こらそんなこと言って、正直なやつじゃ」

「あ、そうだ、今度クラスに転向してきた子がいるんだ。その子ったら変わってて、私が給食のとき今みたいに、手を合わせていただきますっていったらげんな顔するんだ」

「どうして」

「その子がいた学校では、給食の時間は、配

膳の間はずっとマスクをしていて、食べる瞬間にマスクを取って、一礼して無言で食べなくてはいけなかったんだって、だから『いただきます』なんて大声で言ったら怒られちゃうんだって」

「ずいぶんすごい学校があるんだねえ。そういう話を聞くと、お父さん悲しくなっちゃうよ」

「それでさ、その子に『いただきます』ってどういう意味なのって聞かれちゃったの、何でいちいち食べ物に手を合わすのって」

「ちょっと待ってて」

お父さんはそう言うのと、書齋に行って一冊の本を持ってきてくれました。

「これ無着成恭さんの『へその詩』っていう本なんだけど、ほらここに小学六年の子のこういう詩が載っているだろ」

「あらほんと、『いただきます』っていう詩

だ、ちょっと読ませて、

『いただきます』

六年 青木裕香子

ごはんを食べるとき

手を合わせて

「いただきます」っていわなければ

なりません。

無着先生が、そう教えました。

それはどうしてでしょう。

無着先生は、

「生きものは食わなければ死ぬ！

これは法則です。

この法則に例外はありません。

人間は

ごはんとか パンとか

牛肉とか お魚とか

野菜とか——そういうものを食べます。

よく考えてみてください。

ごはんはお米のいのちです。

パンは麦のいのちです。

牛肉は牛のいのちです。

お魚も野菜もみんなみんな

生きていたのです。

そういう生きもののいのちを食べて

人間は生きています。

だから 生きてるってことは

殺してるってことなのです。

だから 手を合わせるのです。

だから 必要以上食べてはいけないのです。

必要以上 食べれば

必要以上 殺すことになります。

人間は

お米や野菜や牛やお魚のいのちで

生かしてもらっているのです」

ごんなふうに教えてくれました。

私は ほんとだと思いました。

気もち悪いノっていった人もいたけれど

私にはよくわかりました。

ごはんを食べるとき

手を合わせて

「いただきます」っていうのは

あなたのいのちをいただいて

生かしてもらってますって

いうことなんです。

(一九八一年七月)

へえ、いい詩だね、ほとよくわかったわ」

「ミーちゃんにとっても、いい勉強になった

みたいだね。食べるってことは、最も宗教的

なことなんだよ。そしてもう一つ、農家の人

をはじめ全ての作ってくれた人にも、そして

太陽や雨など作らした全てのおかげにも感

謝して、改めて『いただきます』しよお」

「食べるって、大変なことなんだねえ」

「それじゃ『いただきます』」

ミーちゃんとお父さんの美味しい美味しい

夕ごはんでした。

待望の新刊

宮林雄彦編

『仏事と信仰生活・浄土宗』

◇◇◇浄土宗の檀信徒には必携の書!!

◇◇◇平明な記述と豊富なイラストによるあかるい装丁の本!!

四六判美装本 一四二ページ

定価八〇〇円 (〒二二〇〇円)

△発行・発売▽ 図書出版 (有) 群 書

〒170 東京都豊島区巢鴨四一七一六―四〇三

TEL (〇三) 九一七―八四一一

(振替) 東東七―一六八七五九

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(4)—

木きの
下した
隆りゅう
一いち

思い出に住む犬について書いているが、ここまでの私に、犬の習性について詳しい知識がある訳ではなかった。関わりを持った犬といえは、クロベエ一匹に過ぎないのだから。それも子供と犬の付き合いで、餌をやるといっても母が作ったものを仲介するだけで、餌を作って与えたという記憶はない。気が向けば毛を梳いて蚤を取ってやったりしたが、大体は躰と称してお手やお預けを強要したに過ぎなかった。犬にしてみれば迷惑以外の何物でもなかったに違いない。

昭和二十一年二月、父が上海から引揚げて来て、大阪の本社に復帰。四月、三原に転勤した。当然この時点で母と私は三原に移らなければならなかったのであるが、その時既に

新学期が始まっていたので、一学期が済むまで転居はお預けとなった。当時の中学は義務教育ではなかったから、転校にはいろいろ制約があった。私立校から私立校、或いは県立校から私立校へというのはさして問題はなかったようだが、県立校から県立校への転校となると、受け入れる側の面子もあって、右から左という訳にはいかないらしく、私は編入試験なるものを受けさせられた。しかしこれは多分に形式的なものだったらしく、その日のうちに編入は許可されたが、もし落第点だったら、三原中学は私の編入を拒否したであろうか、と今でも時々思うことがある。

それはさておき、八月、母と私は両手に持てるだけの荷物（それがすべてだった）を持って、松山の北方にある堀江の港から国鉄の連絡船に乗り、呉の近くの仁方に着き、そこから汽車で三原へ向かったのであるが、ほぼ一日がかりの道中であつた。暑かつたことと、船が遅くもどかしい思いをしたことぐらいいしか今は記憶にないが、夕方八年ぶりに着いた三原は駅前に闇市が立っていて、やたら人が群がって異様な活気を呈していたことを除けば、町のたたずまいは殆ど変わっていなかった。強いて変わったことを挙げれば、昔はどこにでもあつた貸家がないことだった。戦災に遭わなかつた町は人口の流入が激しく、工場の幹部として赴任した父に社宅のあてすらない有様で、当座はやむなく「城見館」という三原城址の近くにあつた会社の寮に仮住まいすることになった。ここは元旅館で、一応ブライバシーは守られるような建て方はされていたが、宿泊者は会社の関係者に限られていたから気兼ねしなければならぬことが多く、多感な中学生にとってはかなり気詰まり

な生活で、十一月の終わりに、そこから歩いて五分程の所に空家が見つかり、引越しが決まった時は正直いってほっとした。

その家は堀川に沿った上り道を行って、川にかかる二メートル足らずの橋を渡り、三十メートル程続く急な坂道の途中にあった。堀川は狭い川だったが落差の大きい川で、川床は階段状になっており、我が家へ曲る橋の下では一メートル弱の深さしかなかったが、そこから川下は急激に落ち込み、暗渠となって町の下に消える辺りは七、八メートルの深さになっていて、梅雨時などは滝となって濁流が流れ落ちていた。通常の川というイメージには程遠く、どちらかといえば谷川と呼ぶ方がふさわしい川であった。堀川という名前から考えると、昔は三原城を囲む堀に流れ込み、川自体城の防衛線の一端を担っていたものと思われる。今は水の乏しい哀れな姿になりさがっているが、そのころはもっと水量豊かな猛々しい川であったに違いない。東側には城山と名付けられた丘陵が南に突き出し、それと対称的に西側には城主の菩提寺の妙正寺があるとところから妙正寺山と呼ばれている丘陵が、これも南に向かって張り出しており、堀川はその狭間を南流する形になっていた。そして我が家はその堀川が運んだ土砂で出来た扇状台地の先端に、辛うじて引っかかるような状態で建っていたと言っているだろう。敷地は明らかに人工的に造成されており、東側と南側は高い石垣で補強されていた。そしてその下には小家の屋根が犇っていた。

八畳、六畳、四畳半、三畳、台所、それに風呂場と便所がついた古ぼけた家で、坂道に沿った板塀は半ば朽ちていて、今にも倒れそうで危かしかったが、住めば都で、約六年四

か月ぶりに親子三人の生活が戻って来たのであった。

家の前の坂道は、十メートル程上った所で天理教の教会の石垣に突き当たり、左に折れて教会の敷地に沿って上がって行くと、道は更にきつい上りとなって妙正寺の墓地へ通じていた。この道は後に私の通学路となった。引越して来た日、教会のコンクリートの階段の上から、一四の大型の日本犬が私たちの動きを眺めていた。秋田犬らしかった。この種の犬を見るのは初めてだった私は、渋谷の忠犬八公を思い描いて、ふと興味を覚えた。

荷物を片づけ終えて、と言っても、父は引揚げ者であったし、母と子は松山で被災して殆ど無一物に近かったから、何程の時間にもかからなかった。外に出てみると、犬は前脚の間に鼻を突っ込んで寝そべったまま、まだこちらを見ていた。台所へ戻っていきこ（煮干し）をひと掴みすると、私は出来るだけゆっくり歩いて教会の階段を上がって行った。犬は一瞬訝しげに目を光らせて私を見たが、寝そべった姿勢は崩さず、私が少し距離を置いて横に腰を下ろした時、フンと鼻を鳴らしたただだった。完全に無視された恰格だった。いきこを一つ掌に載せて「お食べ」と言うと、おもむろに首を上げ、前脚を立てて坐り直すと、二、三度臭いを嗅いでから、そっと口に咥えた。警戒している風は全くなかった。二つ目はすぐ口にした。三つ目も……。奥歯で二、三回噛んで碌に味わうこともせず呑み込んでしまうから、ひと掴みのいきこは忽ちなくなってしまった。それでも大雑把ではあるが犬を観察することは出来た。推定年齢五、六歳の雄だった。全身茶色の毛で覆われていて、顔は真正面から見ると正八角形をしており、小さめの肉厚の耳が立ち、切れ長のや

や吊り気味の目が顔付きを精悍なものにしていた。そして太い尾がきりっと巻いていた。

「また来るからな」と言つて、犬との初会見を切り上げて私が立ち上がると、「何だ、もう帰るのか」といった風に犬は私を見上げたが、前脚を伸ばして寝そべると、脚の間に鼻を突っ込んで目をつぶつた。「無愛想な奴だな」と頭の一つも軽く叩いてやりたかつたが、手を出しかけて危うく私は思いとどまつた。気心が知れるまでは、無理な接し方をしない方がいいと私は判断したのである。

「昨日堀川町に越した。遊びに来いや」

習日登校して友だちに言うと、

「堀川町？あのハチのいる天理教の教会の近くか？」

と、聞き返して来た。

「教会のすぐ下だ。あの犬ハチと言うのか」

「うん。何でも忠犬ハチ公にあやかつてつけたらしい」

そこへ西の方の町から来ている男が話に加わつて来た。

「耳がちよつと前に倒れとるじゃろ。三匹を相手に大立ち廻りをやった時噛まれたんじゃ」

「それでどっちが勝つた？」

と私が聞くと、東の方から来ている奴が話に入つて来て、

「そりゃハチに決まつとる。ハチに敵う犬は三原にはおらん」

と、自分の飼ひ犬でもないのに胸を張り、

「どっちかの前脚が悪うてびっこ引いとるじやろ。ヤクザに木刀で撲られた後遺症じゃ」と、後半のくだりは声をひそめて言った。

「ひどい奴だな、そのヤクザってのは」

「そうでもせんと、ヤクザの飼ってた犬はハチに噛み殺されたかもしれん」

「そんなに強いのかハチは」

「強いなんのって、なあ」

東から来ている奴は、みんなの同意を求めるように周囲を見廻した。

「昨日会ったが、そんな犬には見えなかったぞ」

「ハチも年じゃけえ、まあ晩年の清水の次郎長ってとこじゃ。それに喧嘩しとうても相手がおらんよ」

ハチのどこが晩年の次郎長に似ているのか私は解釈に苦しんだが、それはともかくハチは三原では有名な犬のようであった。その日学校から帰ると、私はハチのことが気になって、教会の階段を上がって行った。ハチはいなかったが、その代りに拝殿の前に、顔色の悪い眼鏡をかけた着流しの男が立っていた。

「あのう、ハチはいませんか」

と私が尋ねると、男は、

「さっきまでいたんだが……。ええと君は下の家に越して来た人だね。三中の三年生か」と、私の服の襟章を見て言った。

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』九月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、再び格調高い小林治郎先生の作品を頂戴することになりました。小林先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度並びに一昨年度の松浦春子先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八―八―二―八七

合掌する善導像

―「立ち止まる善導」連載を終えて―

寺^{てら}
内^{うち}
大^{だい}
吉^{きち}

ある。

○
浄土宗の寺ならたいいてい両大師像が本尊阿彌陀如来の左右に安置されている。ほとくの寺も左善導大師、右が法然上人が坐ってござる。だから幼い時からこの両大師とはお馴じみで

粘土製に着色した美術上の価値をうんぬんするお像ではないが、長年にわたって拝がんでいると血が通って見えてくるから不思議である。そして、法然上人は怖い人、善導さまは優しいお方、という印象が定着してしまった。製作者の造形によるものだ。

未だ小学生の低学年だったころ、父に訊いた。

「このお坊さん、どんな人？」

「支那の偉い人だ。あちらにいる法然さまの先生だよ」

「法然さまは支那語がしゃべれたの」

「どうだかな。それよりもこの善導さまが亡くなって五百年もして法然さまお生まれになったのさ」

「どうして先生になれたの。五百年も前に死んだ人が……」

「ここにいらっしゃる阿弥陀さまをはじめ、両大師さまたち、みんなお前の先生になって下さる人々だよ」

父は子供のぼくにわかり易く両大師の生涯を語ってくれたが、胸にずしりとこたえたのは善導の死であった。高い樹上に登り、そこから身をひるがえして自殺した、と父は教

えてくれた。

女人かと思まがう優しいそのお顔が、自絶という悲劇的(?)な最期とダブって少年のぼくを魅了した。

自殺を本気で考えたのが戦時下だった。大学へ通っていたが、胸を患らい、人生に絶望した。仲間はみんな戦線へ出かけ、為すところもない毎日、ぼくは本堂へ昇殿しては善導さまをふり仰いだ。その優しいお顔を見つめていると、息苦しい穢土を一刻も早く脱出してお浄土へ導いて頂きたいという気分におそわれた。善導さま御自身が長安の光明寺門前にそびえる柳樹に登って、西方を拝がみながら樹下へ身を投ぜられたというではないか。

阿弥陀さまを狭んで右側に坐る法然上人像。その怖いお顔をあらためて見つめながら、当時徒渉していた「法然諸伝」の細節を

脳裏へよみがえらせてみた。

何と言っても上人七十五歳のみぎり、安樂住蓮事件の罪を問われと四国へ流刑された場面が大写しになってひろがった。

あるとき法然上人は「自絶」を考えたであろうか。反乱を企てたであろうか。そんな痕跡は絶無なのである。

もの静かに「法」に従って鳥羽港から旅立たれているのではないか。しかもこれからは四国という辺鄙な地に念仏の輪をひろげるのだ、と新たな決意さえ表明されている。

「偏依善導」と公言され、善導さまの教示を全面的に受容した法然上人が、この「柳樹投身」と「讃岐流刑」とはいちじるしく喰い違いがある。どちらかの史伝に誤まりがあったのではあるまいか。これは両者の史伝を、じっくりと精査し直す必要がある。自殺はそれからでもおそくはあるまい、と思い直すよう

になった。

あれこれと史伝をあさっているうちに終戦を迎えてしまった。周辺の状況は自殺どころではなくなった。さらに敗戦の焼土ではあったが、新しく生きようという希望がひろがった。宿志である小説の世界を探究する意慾も湧いてきた。

戦後生活のなかで、ぼくは小説書きに専念したが、おかげで暗い戦時下に手を染めた法然、善導の史伝からも遠ざかっていった。

再びそこへ意慾が洩流してきたのは五十歳の声を間近に聞こうとするころからであった。本誌に「念仏ひじり三国志」を連載しはじめたのが、そのきっかけとなった、だからこの連載中、つねに法然資料の掘りおこしと併行して善導大師の影を片時も忘れたことがない。それも主題は一点にしぼられていた。

善導さまは、果たして光明寺門前の柳樹か

ら投身自絶したのかどうか。

この不透明だった課題に明確な解答が与えられたのは昭和五十二年の第一次浄土宗訪中団に参加し、洛陽の南にある竜門石窟を拝した折であった。

二万余体の石仏群のなかで最大のものが大磨崖にぎざまれた大廬舎那仏である。この造仏を検校したのが「西京実際寺善導禪師」と碑文で明記してある。起工は咸亨三年四月で、三年と八ヶ月を経た上元二年十二月（六七五）に完成している。

つまり善導大師が間違いなく上元年間（六七四—五）に実在したことを立証しているわけである。

なぜこんな年次にこだわるのか。じつは善導の柳樹捨身と密接にかかわるからである。まず捨身自絶の資料を展覧してみる。

戒珠が宋代（一〇六四年ごろ）に撰した「浄

土往生伝」が唯一つの記述である。

——所居の寺前の柳樹に登り、西に向って願じ……願畢つて其の樹上にて身を投げて自絶す。

ポイントはこれを締めくくった文章である。

——時に京師士大夫、誠を傾けて帰信し、咸其の骨を収めて以て葬す。高宗皇帝、其の念仏が口より光明を出だすを知り、捨報の時精かくの如きを知り、寺額を賜いて光明（寺）を為す。

光明寺命名の由来を紹介する。

善導と同じ時代に生きた道宣はその「続高僧伝」で、やはり光明寺の柳樹から合掌西望、倒投身下地遂死の事件を紹介する。ただし、この捨身者は善導ではなく別人となっている。

しかもはっきりと前文で「時に光明寺に在

りて説法す」と明記する。光明寺の寺号由来が、柳樹投身事件だとすれば、いやそうでなくとも道宣生存中の出来事だとすれば、竜門石窟の大盧舎那仏造像を検校するのは不可能ということになる。なぜなら「統高僧伝」の筆者道宣はこれに先立つ九年前の乾封二年（六六七）に入寂しているからである。

善導が他の諸伝が叙すように永隆二年（六八一）三月十四日「忽無微疾、室に掩じて怡然として長逝」したのが正しい往生であろう。

また傍証としても善導の高弟懐感の「自絶願望」がある。三階教団の行者だった懐感はその教えでは満たされず、善導の門に投じてくる。「宋高僧伝」は二十一日間、念仏修法をおさめた懐感がそれでも満たされず、自らの罪障の深さを悔い、食を絶してわが命を絶とうとこころみる。これを聞いた善導は出向

いていって懐感を説得し、なお三年間の念仏精進をすすめる。懐感もこれを容れて見事な念仏者に変身したと言われる。

他人の自絶を説得した善導が、自ら柳樹から身を投ずる暴挙を選ぶであらうか。



善導の投身自絶に明確な否定資料を掴んだぼくは、その伝の筆を起こす勇気が湧いてきた。これは同時に「念仏ひじり三國志」で法然をめぐる人々を探索した前作を、さらに源流へさかのぼらせる重要な仕事でもあった。

「観無量寿経疏」をはじめ「往生礼讃」「法事讃」「般舟讃」「観念法門」など、その著作はあるが、こと史伝となると断片的できわめて寡少である。小説的な舞文やふくらましを用いないことには、かえって諸著作の真意さ

え迫り得ないのである。連載を書き上げたあとにもなお不安と動揺を禁じ得なかった。これを上梓するためには、抜本的な手直しが要求されるぞ、と自らを戒めているところである。

ところで善導教学とは全く無縁な人から、ハッと胸をつかれるような指摘を最近になって受けた。

「いろいろな坊さんの御影やお像があります、合掌した善導さまの絵像ほど仏や仏の国を熱烈に求めている感じのお姿はありませんなあ」

おそらくこの人は、ひろくゆきわたった知恩院蔵の絵像を語っているのであろう。合掌が、ただ両の手の平を合わせているだけではないという。ひたすらに弥陀を欣慕し、その光明を探ぐりあてようとする合掌だ。

もちろん、この絵像は後世の作であって、

善導の人柄や行蹟、思想を絵画化している。

また美目秀麗、「往生礼讃」にあればどの情念をこめた点からすれば美声の持主だったとも思われる。しかも「眼をあげて女人を見ず」と言われたほど戒心堅固な修法者でもあった。そのような後世の「思い入れ」を割引きしても善導の西方願生者としての信仰があの絵像は直截に語りつたえている。

ひと口に浄土の三部経と言う。そのうちで「観無量寿経」は、経題は「大経」（「無量寿経」に付属した經典のように見える。しかし、ぼくは立派な独立した經典であると信じている。すくなくとも善導はその「経疏」によって独立させたのではなからうか。

一例を取り上げる。

「大経」における弥陀の誓願、いわゆる四十八願はその第十八において万人への救済を誓う。ただし五逆罪を犯した者とか謗法者を除

くと付記する。父母を殺したり、仏法をねじ曲げた者はこの救済を浴さないのである。

だが「観経」の下品下生では、そんなただし書きを否定した。善導も「観経疏」でその点を強調し、南無阿弥陀仏を口に唱えさえすれば、と弥陀の慈悲の深さを称揚してやまない。

もっとも同じ「大経」でも以前に編まれた二十四願経では阿闍世王授記が挿入されているので、このただし書きは不必要だ。阿闍世王は書くまでもなく父王の頻婆娑羅を殺害した大逆罪を犯している。

四十八願経と「観無量寿経」とだけを連帯させようとすれば、こんな矛盾が発生してくる。併存させるべきであって、同じ系列下とはなり得ない。抑止門とか攝取門などの分類は一つの理屈にすぎない。

理屈と言え、この例証も区々たる文様の

異差であって、これだけで「観経」が「大経」に従属するものではないというキメ手とはなり得まい。

ほんらい「観経」は「観仏三昧経」と呼ばれ、阿弥陀仏をひたすらに「観ずる」ことを説いた経典であった。ひたすらに「観ずる」のであって、それを内奥へ取りこんだ観念——観念の「念にもあらず」なのである。

法然の「偏依善導」もそこにあつたはずで、善導が祈りの原点からひたすらに阿弥陀仏を渴仰し、その御名を唱え続けた信心の姿勢を疑うことなく受容したのであつた。

まさに善導の「祈りの原点」をあのか掌絵像が象形している。組み合わせた掌心、細い指先は何を求めさぐろうとしているのであるうか。

ぼくは、こんどの「立ち止まるな善導」で、ことさらにその内面へ立ち入る憶測を避

けた。資料も乏しかったが、善導にあってはかなり若年の時点で、念仏信仰が確立していた事実がうかがえたからである。

一代の崇仏帝だった梁の武帝は反乱者侯景に幽閉されたとき、自らを王舎城の頻婆娑羅になどらえ、「観無量寿經」が語る獄内へ身而に塗りこんだ蜜を舐めて栄養を補給する逸話をそっくり真似たと言われる。善導の出生地を安徽省の泗州と断定し、旧梁朝の一族か末裔とした飛躍もこの「観經」への依憑が論拠となっている。

善導が登場した唐王朝の成立時、仏教は新たな開明期を迎えつつあった。仏教が渡来して数世紀を過ぎたが、その受容ぶりに中国の色調が濃厚に混色されていた事実を見逃すわけにはいかない。道教との習合である。

この中国古来の神威思想は牢固たる精神基盤を宏大な大地と民衆の血流のなかく構築し

ていた。外来のすべてを中国化するいわゆる中華思想である。仏教も例外とはなり得なかった。

仏教を本来の純粹な宗教思想へ回帰させよう、という試みが多くの仏者によって企図された。インドへ原典を求めて艱難な長旅をなし遂げた玄奘三蔵もその一人である。

無量寿仏という漢訳語が、いつのまにか無量寿仏自体を道教の神にまつりあげてしまった。広く国境や身分を越えて万人を救う無量寿仏が特定の民族における祖霊神の一員に取りこまれたのである。同じ訳語と原語だけの異差にもかかわらず、善導があえて「南無阿弥陀仏」を高唱した理由もそこにあったであろう。

開明期だったがために中国の民衆は新たな感度で仏教に飛びついた。善導は阿弥陀仏の名をひろめる目的もあつてか、「弥陀經」写

スコト数万巻」でこれを長安の街角で配布した。「士女ノ奉ズル者其ノ数無量」と道宣は「統高僧伝」で書いている。

この写経数万巻と言ひ、念仏の広行と言ひ、また、「導(善導)堂ニ入り、則チ合掌、踞跪一心念仏、力竭(つ)キザレバ休マズ」(「新修往生伝」)という本人の淳乎たる信仰がなければ、善男善女を魅きつけることは出来まい。

ぼくはあの絵像から、そんな遠い千三百年むかしの風景が薄明の彼方にはあったが、見えてくる思いであった。

○

ところで善導の合掌。その細い指先で何を求めようとしていたのか。

ぼくは「往生礼讃」の一句を思いうかべる。

「光明名号八十方ヲ摂化ス」

阿弥陀仏の光明と名号は十万の世界をあまねく救い給う、という意味だ。となると名号を唱える対象となる阿弥陀仏の実体は何であろうか。

「観経」の真身観文が説くように、途微もない巨容である。われらの肉眼では拝し得ないほどである。肉眼ではとらえられなくともそのお身体から発する光りは、あまねく隅々まで、どんな倭小な命までをも照らし出してくれるという。

合掌した善導の指先、それはこの光明を掬い上げようと、ひたむきな渴仰の視座からまさぐっているのではなからうか。

弥陀の光明——ぼくらは伝えられた言葉を鵜呑みにして、漠然と幻想の世界でこれを把らえてきた。

だが、ここで次の文章に眼を向けよう。

——突然、純粋なエネルギーの塊りが誕生

し、想像を絶する輝きが空間を満たすのである。この火の玉の宇宙が広がって冷却し、数分後には最初の物質粒子が溶鉱炉のなかで凝縮する金属粒子の滴くのように現れてくる。

ちりぢりになっている粒子は集合して、まず原子核となり、ついで原子となった。初期の宇宙を満たしていた高温度は、目のくらむような輝きも弱まって、冷めたい水素のおだやかな雲となる。水素雲のなかでは、巨大な銀河が形成され、それぞれの銀河のなかでは次々とおびただしい数の星が誕生する。これらの星の多くは、惑星に囲まれている。そんな惑星の一つである地球上には生命が発生し、その長い発展の歴史をたどって人類が発生した。

これは現代の科学者が到達し得た「宇宙創成」のすべてと「人類の出現」の推定図であ

る（ジャストロウ「太陽が死ぬ日まで」）。

阿弥陀仏を「水素雲のなかで作成された巨大な銀河」に置きかえて観想したとき、ぼくらは「観経」がえがくあの巨容と、そこから発する光明の実体が何であったかに気づくであらう。現代物理学におけるように組織的な論証こそ加えられてはいないが、二千年昔の釈尊仏教は、すでに人間の生命が発生した根源を直感でとらえていたことになる。

ちなみに「無量寿経」は、阿弥陀仏が誕生するまでの過去仏を紹介しているが、その始祖を燃灯仏と名づけている。熱と光りの仏である。「純粋なエネルギーの塊りが誕生し、想像を絶する輝きが空間を満たす。この火の玉の宇宙が広がって冷却し……」と現代の科学者がたどる宇宙の創成史と不思議に符合する。

さらに物理学者ジャストロウの文章を続け

る。

——大多數の科学者が正しいと認めるこの宇宙創成から進化への壮大な物語は、およそ二百億年昔に始まる。科学は聖書と異なり、この偉大な創成の原因を何も説明していない。宇宙の空間と時間とが始まって以来、そこで起ったすべての出来事は、最初の原因はわかっていないが、何かがもたらした壮大な結果なのである。

「観経」では阿弥陀仏の「仏身」を「宇宙に遍満する」と説く。そして、われわれが触れ合えるのは、その化身から発する光明だけだ、とも力説する。

ただこの光明に慈悲がこもっていると強調する点が物理学と異なる。もともと近代の科学はこの宇宙光線を磁気波と断定し、多彩なファイバー光学を開発している。まさしく磁気波は慈悲心と通じるのであるか。

善導がこの阿弥陀仏一身にすべてを傾け尽くし、「観無量寿経」だけと取り組んだ姿勢は、仏教の開明期たる唐初の旗手にふさわしい生涯であった。

そんな善導像をどこまで描ききれたか。書き終えたあともなお不安は残っている。

じつはこれを単行本にまとめるべき作業をせつかれているのだが、読みかえすのが恐ろしくていまだに手をつけていない始末だ。そのくせ頭脳内ではさまざまな場面における善導の姿がゆれうごいて静止しようとしないのである。



最後に五年間も連載させてもらった『浄土』誌に一言ふれておきたい。「念仏ひじり三国志」の八年間連載を如えろと、じつに十

三年に及ぶ。

しかし、ぼく自身の文筆における揺籃はこの『浄土』誌だったのである。

未だ大正大学の学生だったころ、アルバイトで編集部へはいったのが文筆との馴れ初めであった。学徒出陣で、みんなが戦線へ去ったあと、病身のぼくは勤労働員にも耐えられそうにもなく大学を休学、だいぶ恢復してきただけで『浄土』誌を手伝わせてもらった。四十数年も昔のことである。

誌面では随筆などを書かせてもらったが、その掌篇でソロモン群島の航空戦へ出陣する小学校の同期生に数珠を贈った話がある。その晩は仲好しだった三人組が集り、豆腐屋の息子がパイロットで、あとの一人は工学部の学生だった。つまりぼくと久米君という工学部との二人で豆腐屋のヨッちゃんを送ったわけである。ヨッちゃんはそのまま南漢で散華

した。

工学部の久米君は現在、日産自動車の社長さんである。ぼくも元気で仕事をさせてもらっている。お互いに孫もいる。ヨッちゃんの顔を思い浮かべると、いつも断腸の念にとらわれる。

あの晩、手渡した数珠を飛行服のポケットにしおぼせていてくれたであろうか。炎に包まれて海面へ突入してゆく機内の座席で、せめて数珠を握りしめていてくれたら、とも思う。

善導さまの合掌、あの救いを求めて見上げている眸――

ぼくは豆腐屋のヨッちゃんのために祈って下さっているんだ、と信じたい。

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
とめ下さい。

一、枚数 四百字詰用紙六～九枚程度

一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十四巻 九月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十三年八月二十五日 印刷
昭和六十三年九月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番
電話東京二六二局五九四四番

◇ ◇ ◇ 新刊紹介 ◇ ◇ ◇

古今俳句の鑑賞

『採 芳 巡 礼』

島根大学名誉教授

伊 澤 元 美 著

◎「俳句」とは何か——芭蕉から山頭火まで、縦横に俳句史の世界を巡りつづけて五十有余年、近代文学研究の手法での批評活動の基底にある想いを江戸から現代の俳人たちの名句を通して語る。俳句の一語一音の意味と形式を優しく、そして鋭く解き明かしてくれる。

B 6 判 一六七ページ 定価二〇〇〇円

△発行・発売▽ キ ュ ー ブ 社

〒162 東京都新宿区市谷本村町二―三三―二〇一

振替(東京)四―三六五六三一 電話(〇三)二六八一―八六七

第五十四巻

九月号

昭和十年五月二十日

(第三種郵便物認可)

毎月一回一日発行

昭和六十二年八月二十五日印刷

昭和六十二年九月一日発行